

[演題9] 心臓外科患者の術後早期における自己効力感の変化

西村 真人^{1,2)} 松尾 善美³⁾ 大久保 裕介¹⁾ 古田 宏¹⁾
河村 知範^{1,2)} 津本 直美¹⁾

1) 岸和田徳洲会病院 リハビリテーション科

2) 総合リハビリテーション学研究科 医療リハビリテーション学専攻

3) 医療リハビリテーション学科 理学療法学専攻

1. はじめに

心疾患の二次予防を達成するには、運動療法、食事療法の施行・継続が重要である。しかし、運動習慣を有していた患者が、術後にその習慣化していた運動を中止するということをしばしば経験する。今回、我々は運動療法の施行・継続に関して影響があるとされる自己効力感の心臓外科手術後早期の変化について調査をする機会を得たので、その結果を報告する。

2. 対象

対象は、岸和田徳洲会病院心臓血管外科で2009年6月から2010年7月に待期的開心術を行った症例で、術前のニューヨーク心臓協会心機能分類(以下NYHA)Ⅰ・Ⅱ、術前・術後の左室駆出率30%以上で、研究の主旨を説明し、同意の得られた症例であり、術後経過が良好で退院前の心肺運動負荷試験において嫌気性代謝域値(AT値)が2.0代謝当量以上の症例38名である。なお、歩行を妨げる運動障害や運動指導を理解できない認知症などを有する症例は除外した。

3. 方法

方法は、手術前と術後1週目、退院後診察時に運動に関する自己効力感には自己調整効力感(自己調整SE)と課題効力感(課題SE)を、不安と抑うつにはHospital anxiety and depression scale (HADS)を用いて測定した。また、日常生活動作と運動に対する不安も測定した。入院前の運動習慣と握力は、手術前に調査・測定した。術後疼痛は、Visual analog scaleを使用し、血液検査値と左室駆出率、心肺運動負荷試験による嫌気性代謝域値は、手術前後の通常診療の検査・測定値を用いた。術前自己調整SEの中央値で2群に分割し、その2群間の差と自己効力感、不安・抑うつの経時的変化について検討した。

統計学的処理は、Dr. SPSS (SPSS, 東京)を用い、危険率5%未満を有意とした。2群間の差の検定は、 χ^2 乗検定、Mann-WhitneyのU検定を用いた。経時的変化はFreidman検定を行い、有意差のあったものをWilcoxonの符号付順位検定にBonferroniの不等式による修正を行った。

本研究は、岸和田徳洲会病院倫理委員会と神戸学院大学ヒトを対象とする研究等倫理委員会において承認受け、実施した。

4. 結果

2群間の比較において、術前には、高自己調整SE患者(以下HSE)群でNYHAⅠ11名、Ⅱ8名、低自己調整SE患者(以下LSE)群はNYHAⅠ4名、Ⅱ15名とHSE群に軽症者が多かった($p < 0.05$)。また、群間比較では、HSE群で入院前に1週間あたりの運動回数が多く($p < 0.05$)、「60分以上歩く自信がある」

という課題 SE が高かった ($p < 0.05$)。術後には、HSE 群で日常生活動作に対する不安が高かった ($p < 0.05$)。また、術後の自己調整 SE は HSE 群が高かった ($p < 0.05$) が、術前有意差のあった「60 分以上歩く自信がある」という課題 SE の有意差は消失した。

自己調整 SE や抑うつ、不安に継時的変化はなかったが、HSE 群で「60 分以上歩く自信がある」課題 SE が、術前と比較して術後と診察時が有意に低下した ($p < 0.005$) (図 1)。LSE 群では、「30 分以上歩く自信がある」課題 SE が、術後に低下した ($p < 0.05$) が、術前と診察時では差がなかった (図 2)。

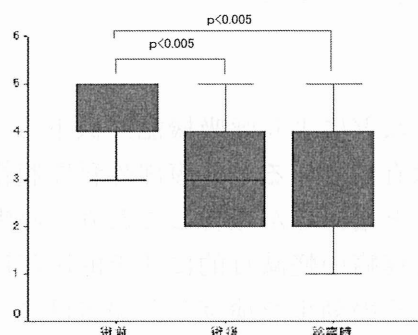


図 1 HSE 群の「60 分以上歩く自信がある」課題 SE の変化

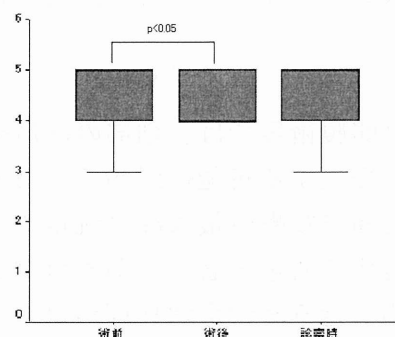


図 2 LSE 群の「30 分歩く自信がある」課題 SE の変化

5. 考察

本研究では、自己調整 SE が高い患者は、課題 SE に術後長期間影響を受けることが示唆された。自己調整 SE は、運動の継続を阻害する様々な状況において、定期的な身体活動や運動を行うことができるかどうかの見込み感である。自己調整 SE は、運動行動変容の段階が後期になるにつれて、自己調整 SE 得点が高くなると報告されている。逆に、運動行動変容の段階が逆戻りすることにより、自己調整 SE 得点は低くなる。運動習慣を有していた患者が、術後にその習慣化していた運動を中止することは、自己調整 SE が減少していると考えられる。

今回、HSE 群は LSE 群に比べ、術後日常生活動作に対する不安が高かったが、抑うつや不安、日常生活動作や運動に対する不安に継時的変化はなかった。しかし、「60 分以上歩く自信がある」という課題 SE のみが、術前に比べ術後、退院後とも低下していた。これらのことから、低下した課題 SE が後に自己調整 SE に影響を与え、習慣化していた運動を中止することにつながる可能性がある。今後、継続して調査を行い、適切なアプローチの方法を検討する必要がある。LSE 群に関しては、行動変容の段階に応じ、意識の高揚や言語的説得、遂行行動の達成を通して運動行動変容を促すことが重要である。

参考文献

- [1] 岡浩一郎：中年者における運動行動の変容段階と運動セルフ・エフィカシーの関係．日本公衆衛生雑誌 2003；50：208-215.
- [2] 坂野雄二，前田基成：19 章 運動アドヒレンス—身体活動・運動促進，セルフエフィカシーの臨床心理学．北大路書房，218-234，東京，2002.